
4 水産物の販売不振の実態

1. 調査の概要
2. 福島県産水産物に関するヒアリング結果
3. 調査のまとめと今後の方向性

参考：品目別のヒアリング結果

1. 調査の概要

117

調査の背景・目的

福島県産水産物の量・価格が震災前の水準に戻っていないケースが見受けられるため、販売不振等の実態と要因を明らかにすることを目的としている。

【調査の背景】

- 他県産と比較した福島県産水産物の出荷量は震災前の水準まで回復しておらず、魚種によっては価格も震災前の水準まで回復していない状況が見受けられる。
- 青果物と比べ、水産物は風評被害の影響が大きいという声も聞かれる。

【調査の目的】

- 販売不振等の実態と要因を明らかにするため、漁獲から流通・販売に至るサプライチェーンの各段階における流通実態の調査を行い、今後の施策検討に資する分析結果として取りまとめる。

118

ヒラメ、カレイ類、カツオ、マアナゴ、コウナゴの5品目を対象に価格・量・流通経路・販売先の反応・販売促進に関する取組について、ヒアリング調査を実施した。

■調査方法

- ✓ 訪問によるヒアリング

■対象品目

- ✓ ヒラメ、カレイ類、カツオ、マアナゴ、コウナゴ

■調査項目

- ✓ 対象品目の漁獲量、取扱量
- ✓ 対象品目の仕入価格、販売価格
- ✓ 対象品目の流通経路（仕入先、販売先）
- ✓ 販売先の反応
- ✓ 販売促進に関する取組
- ✓ その他

■ヒアリング対象企業

- ✓ 首都圏の卸売業者 5 社（以下、首都圏卸A、B、C、D、E）
- ✓ 首都圏の小売業者 2 社（以下、首都圏小売F、G）
- ✓ 福島県の漁協 2 社（以下、福島漁協H、I）
- ✓ 福島県の卸売業者 2 社（以下、福島卸J、K）
- ✓ 福島県の仲卸業者 1 社（以下、福島仲卸L）※福島仲卸Lは産地市場の仲卸業者
- ✓ 福島県の小売業者 2 社（以下、福島小売M、N）

2. 福島県産水産物に関するヒアリング結果

震災前に比べて、福島県産水産物は全体的に漁獲量が少ない。そのため、各流通段階における取扱量も震災前と比べ、減少している。

ヒアリング結果

福島県産水産物の量について

- 常磐沖においては、どの魚種も全体的に漁獲量は多くない。(福島卸K)
- どの漁港も全体的に需要に対して漁獲量は少ないが、相馬港や久之浜港では他の福島県の港に比べて比較的漁獲量がある。相馬の船で漁獲が多くあった場合、小名浜港では十分に漁獲がないため、試験的に小名浜港に揚げている。(福島卸K)
- もっと「常磐もの」を販売したいという希望はあるが、試験操業が続いているため、漁獲量が少ないことを課題に感じている。(福島卸K)
- 福島県産は漁獲量が少なく、小売店では一般的に取引自体があまり行われていないので、福島県産品は風評のため取扱われていないのか、量が少ないから取り扱われていないのか分からない。福島県外に流通するほどの漁獲量が無く、他社では取扱いの是非を判断するまでに至っていないのではないかと。(首都圏小売F)



福島漁協I

- 中央市場の卸売業者が出荷増を望んでいることは認識しているが、量を増やしても価格を維持できるのか分からないため、性急に漁獲量を増やすことは難しい。



首都圏小売G

- 福島県産品の販売を拡大したいのであれば、もっと量を捕りに行く必要があるのではないかと。現在のロットは、量販店が仕入れるには小さすぎて買いにくい。



首都圏卸A

- 出荷量を増やせば一時的に価格は下がるだろう。しかし、それを我慢して出荷し続けなければ、福島県産品を買う顧客を作ることはできない。

福島県産水産物の価格について

震災直後と比較し、ここ数年で価格が戻ってきている傾向にある。本調査の中では、買い叩きは確認されなかった。

ヒアリング結果

福島県産水産物の価格について

- 魚は水揚漁港や締め方、品質などで単価水準が大きく異なる。(福島卸J)
- 「常磐もの」として年々評価・単価が上がっている。(福島卸J)
- 福島県産と他県産の価格の形成に違いはなく、同じである。(福島卸K)
- 価格は震災前と比べて、感覚的には変わらない。震災前から、北海道産と福島県産が並べば、北海道産が先に売れており、その差が大きくなっている感覚はない。(福島卸L)
- 福島県産は他県産と比べて、値段の付け方が違うわけではない。(首都圏卸A)
- 昨年くらいから、他産地と相場の動きが合うようになってきた。(首都圏卸D)
- 少し前までは、物量が足りなくても福島県産品だけ値段が上がらないということがあった。現在は、物量がある時は安く、物量がない時は高いといった通常の動きになっている。(首都圏卸D)
- 福島県で漁獲量が増えても、全国的に魚不足であるため、大きく値下げすることはないと思う。(福島卸K)
- 継続的に物量があれば、消費者にとって福島県産が身近なものとなることで、敬遠されなくなり、単価が下がらなくなると思う。(首都圏卸B)



首都圏小売F

- 福島県産品であっても浜値は適正であり、また、各流通段階における価格の推移も適正である。



福島漁協I

- 価格は跳ね上がる時もあるが、ここ2～3年大きく変わっていない印象。





首都圏卸B

- 震災直後の流通再開時は半値ほどに落ちたが、ここ1～2年で持ち直してきた。(カレイ)

福島県産水産物の流通経路として、量販店への販売は震災後かなり少なくなっており、福島県産品の取扱いを拒否しているケースも見られる。

ヒアリング結果

福島県産水産物の流通経路について	仕入先	<ul style="list-style-type: none"> 仕入先は震災前から変わらない。(首都圏卸D) 仲卸業者は、福島県産品を問題なく取り扱っている。(首都圏卸E)
	販売先	<ul style="list-style-type: none"> 量販店は福島県産品を避ける傾向がある。(首都圏卸A) 量販店の中には産地指定をし、福島県産品を取り扱わないところがある。(首都圏卸C) 小売店が百貨店内のテナントの場合は、百貨店本体が拒否することが多い。(首都圏卸D) 取扱いを中止したところは、福島県産の取扱いを再開するかどうかの検討もしていないように感じる。(首都圏卸D) <div style="margin-top: 10px;">  <p>福島漁協I</p> <p>漁獲量を増やしても、卸売業者は販路を確保してくれるか分からない。</p> </div> <div style="margin-top: 10px;">  <p>福島仲卸L</p> <p>現在は漁獲量が少ないため、高単価で少量を注文する顧客にのみ販売している。しかし、漁獲量を増やしてもらい、量販店などの高単価ではないが多くの量を仕入れる販売先にも売り込んでいきたい。</p> </div>

123

福島県産水産物への反応について

福島県産水産物を問題視するお客様の声はないとの小売店がある一方で、いまだに福島県産品に抵抗がある人は一定数おり、風評がないとは言えない。

ヒアリング結果

福島県産水産物に対する反応について	抵抗がない	<ul style="list-style-type: none"> どの魚種に関しても福島県内のお客様は福島県産の魚に対して抵抗がないように感じる。(福島小売N) 仲卸業者は、品質重視で購入するため、福島県産品だからという理由で購入しない人はあまりいない。(首都圏卸D) 福島県産品を入荷した際に数店舗にお客様の反応を確認したが、福島県産品を問題視するお客様の声はなかった。また、他県産品と比べても、売上やロス率に違いはなかった。(首都圏小売F) 福島県産品の販売をする中で20~30代のお客様が増えた。乳児を連れた20代女性が購入しているケースもある。(首都圏小売G)
	抵抗がある	<ul style="list-style-type: none"> 風評が全くなくなったとは言えない状況だと思う。(福島卸J) 福島県産品を敬遠している人を売場で見るとは無いが、消費者の中には福島県産品を敬遠している人もいるかもしれない。(福島小売M) 福島県産品に拒否反応を示す人は一定数いると考える。子供に食べさせる親もいれば、食べさせない親もいる。(福島漁協H) 福島県産品の品質は他県産と遜色ないが、いまだに福島県産というだけで売れないことがある。(首都圏卸A) 福島県産品の安全性・美味しさを理解していない消費者がいる。(首都圏小売G) 福島県内のお客様と比べて、茨城県のお客様は福島県産に多少の抵抗はあるようだ。(福島小売N)

124

販売促進の取組はあまり行われていないが、加工品の開発といった取組を積極的に行っている会社がある。また、放射線量の自主検査をすることで、福島県産品の安全性を担保している会社がある。

ヒアリング結果

福島県産水産物に関する取組について	商品開発	<ul style="list-style-type: none"> 沿岸、沖合の生の魚を増やすだけでなく、冷凍向けの魚の漁獲量を増やす方向を考えている。(福島漁協H) 会社の売上が全体的に落ちていたため、震災後に煮魚といったすぐに食べられる加工品を開発した。(福島小売M) 福島県産品を煮魚のパック、薫焼き、缶詰等の加工品にして販売している。(首都圏小売G)
	販売提案	<ul style="list-style-type: none"> 農産物と違い、水産物は風評払拭のPRや営業提案がされていないように感じる。(首都圏卸B) 福島県産品は品質的には他産地と全く変わらないが、十分な物量がないため、販売提案に参加できない。(首都圏卸B)
	自主検査	<ul style="list-style-type: none"> 震災事故後から、太平洋で捕れたものは自主基準値を基に放射線量の自社検査をしている。基準値を超えなかったものは産地を問わず取扱いをしており、福島県産だから買わないことはない。(首都圏小売F) 震災事故後から、1週間に1回放射線量の自社検査をして、安全性を担保している。(首都圏小売G)




首都圏卸D

震災前から販売の取組は大きく変わっていない。魚が良ければお客さんに勧めていくだけだ。

震災以降、福島県産品を取り巻く状況は変化しており、現況にあった取組が必要である。福島県産品のブランド化や漁獲量を増やすことに力を入れるべきとの意見が多く上がった。

ヒアリング結果

福島県産水産物についての課題	人材	<ul style="list-style-type: none"> 小名浜港では冷凍魚倉(そう)で水揚作業をする専門作業員(ステベ)が一人もいない。ステベの育成には時間を要するが、募集しても応募しない状況。(福島漁協H)
	ブランド	<ul style="list-style-type: none"> 時間はかかるかもしれないが、気仙沼等の他産地のように、福島県においてもブランド化に力を入れるべきではないか。(首都圏卸B) <div style="margin-top: 10px;">  <p>宮城県など福島県周辺も同様に震災の被害を受けたが、他産地は加工施設を作るなど、震災後に色々と工夫をしてブランド化を進めている。</p> </div>
	環境の変化	<ul style="list-style-type: none"> 築地市場から豊洲市場に移転したことで、一匹一匹魚を見て買っていきような人が減り、量販店向きになってきている。そのため、品質が良くても、まとまった量が出荷されない物は、売りにくくなっている。(首都圏卸D)

首都圏卸C

3. 調査のまとめと今後の方向性

127

ヒアリングのまとめ

福島県産水産物の現状として、価格の回復傾向や、「常磐もの」の品質面での高評価などの声があがった。一方で、漁獲量が十分でないことや、量販店での取扱いが限られることが課題として上げられた。

福島県産水産物の現状	量	<ul style="list-style-type: none">震災後、漁獲量が回復していない状況にある。漁獲量が少ないため、卸売業者の取扱量も少ないままとまっている。
	価格	<ul style="list-style-type: none">価格は回復傾向にあり、ここ1～2年程度で回復してきたとの意見が複数上がった。相場の値動きについても他産地と変わらないとの意見が上がった。産地では、今後の見通しとして漁獲量増加時の価格低下を懸念している。
	流通経路	<ul style="list-style-type: none">首都圏の大手卸売業者の多くが福島県産品を取り扱っている。卸売業者からの販売先のうち、量販店は震災後に福島県産品の取扱いをやめたままのところが多い。一方、量販店以外では福島県産品を取り扱わない事業者はほぼいない。
	福島県産品への反応	<ul style="list-style-type: none">福島県産品に対して抵抗がないという意見と、抵抗があるという意見が分かれる状況。はっきりと福島県産品を拒否する消費者は少なくなっている。「常磐もの」として品質面の評価が高い。
	販売促進の取組	<ul style="list-style-type: none">青果物等と比べて、水産物においては販売促進に関する取組が少ない。一部の事業者では、加工品の開発等で一定の成果を上げている。販売面では、漁獲量が少ない上に一定ではなく、出荷があつたりなかつたりと不安定であるため、卸売業者にとって売りづらい状況になっている。

128

ヒアリングをした事業者から、福島県産水産物の販売を促進するためには、量販店での取扱いを再開してもらうための取組や、福島県での漁獲量を増やすための対策が必要であるとの意見が上がった。

販売不振の
要因、背景

- 福島県産水産物の販売不振は、主に
 - ①一般消費者の主要な購買機会である量販店が取扱いを敬遠していること
 - ②福島県産水産物の流通量が少なすぎることの2点に起因すると考えられる。
- ①について、量販店がこのような対応をする理由として、福島県産品を避けている消費者が一定数存在することや、福島県産水産物に何か問題が出た場合に説明責任が生じたり、自社のイメージが損なわれたりすることへのリスクを回避しているとの意見が上がった（卸売業者の意見）。
- ②について、福島県産水産物の流通量が少ない背景は、震災前と比較して産地での漁獲量が少ないことが要因といえる。

販売不振の
解消に向けた
意見

- ①について、検査において放射性物質が不検出で安全性が担保されていることや、福島県産品の取扱いにおける問題が過去に生じていないことを量販店に対して説明する等、福島県産品は安全性が確保されていることを伝えていく取組が事業者から求められた。
- ②について、量販店で取り扱ってもらうにはある程度多くの安定した物量が必要となることから、福島県での漁獲量を増やすための新たな対策が求められた。特に、出荷を切らさずコンスタントに出し続けることを希望する声が上がった。

漁獲量の拡大に向けて

卸売業者等からは、出荷量を増やす必要があるとの意見がある一方で、漁協からは出荷量を増やすと価格を維持できないのではないかという意見があった。事業者間での見通しに食い違いがある。



福島漁協I

中央市場の卸売業者が出荷増を望んでいることは認識しているが、量を増やしても価格を維持できるのか分からないため、性急に漁獲量を増やすことは難しい。



福島仲卸L

現在は漁獲量が少ないため、高単価で少量を注文する顧客にのみ販売している。しかし、漁獲量を増やしてもらい、量販店などの高単価ではないが多くの量を仕入れる販売先にも売り込んでいきたい。



首都圏卸A

出荷量を増やせば一時的に価格は下がるだろう。しかし、それを我慢して出荷し続けなければ、福島県産品を買う顧客を作ることはできない。



首都圏小売G

福島県産品の販売を拡大したいのであれば、もっと量を取りに行く必要があるのではないか。現在のロットは、量販店が仕入れるには小さすぎて買いにくい。

参考：品目別のヒアリング結果

131

福島県産ヒラメの量について

福島県産ヒラメは、週に何度か漁獲はあるものの、震災前に比べると漁獲量は減少している。そのため、各流通段階における取扱量も震災前と比べ減少している。

ヒアリング結果

福島県産ヒラメの
量について

- 底びき網船が週3日、小型のさし網船が週4日操業している。（福島漁協H）
- 天候を考慮しながら、毎週金曜日に翌週の試験操業日を決定しており、ヒラメの漁獲は試験操業日次第である。（福島漁協I）
- 週何回か仕入れるが、毎日仕入れるわけではない。（首都圏卸A）
- 福島県においてヒラメは周年で安定的に捕れている。（福島漁協H）
- 漁獲量は震災前の15%で、売れ残りはない。買受人が減っており、最大規模で漁獲した場合は売り切ることができるか不明確なため、漁獲量を抑えている状況。（福島漁協H）
- 取扱量は風評の影響と関係がなく、漁獲量と比例する。（福島卸K）
- 震災前と比べて当社の取扱量は30分の1から50分の1くらいに激減している。（首都圏卸A）
- 震災後と比べて、3～4年程前から取扱量は徐々に回復はしているが、震災前の40%程度だと思う。（首都圏卸C）
- 取り扱うかどうかは、福島県産と他産地の浜値の兼ね合いも影響する。青森県・茨城県・熊本県・北海道など他の産地が時化で相場が上がったときは、特に福島県産の取扱いを増やす。現在よりも漁獲量が増えたとしても、問題なく扱えると思う。（首都圏卸C）



首都圏卸D

- ヒラメはまとまった量で入荷するようになってきたものの、トン単位で入荷することはない。

132

福島県産ヒラメは宮城県・茨城県といった他産地のものと同様の値動きをする。また、「常磐もの」として評価され、値段が上がっているという声も聞かれた。

ヒアリング結果

福島県産ヒラメの価格について

- 活魚に関しては、震災前は卸値が1キロあたり5,000～10,000円になることもあった。(首都圏卸A)
- 福島県産と茨城県産では、品質以外の要因で価格差が出ることはない。(福島卸J)
- 福島県産は「常磐もの」として年々評価・単価が上がっている。(福島卸J)
- 現在は、相場は落ち着いており、昨年と変わらない。(福島卸K)
- 福島県と茨城県、宮城県の港の事業者は、常に連絡を取り合ってお互いの相場を見ながら価格形成しているため、浜の相場が同程度になっている。(首都圏卸E)
- 福島県のヒラメは銚子港で漁獲があると価格が暴落する。銚子港で漁獲がないと良い値段が出ることもある。(福島漁協I)
- 仕入の値段は震災前より安くなっている。(福島小売M)
- 2018年度の卸売価格は、底びきものでキロ当たり1,000円から2,000円弱程度、釣りものは、キロ当たり3,000円程度であった。(福島卸K)
- 販売価格の相場は、他県産の同じ漁法のものとは比べて、1キロあたり200～300円安い状況である。(首都圏卸A)



首都圏卸E

- 福島県産ヒラメの価格は、他県産と同じような動きだと思う。

133

福島県産ヒラメの流通経路について

福島県産ヒラメについては、仲卸業者・個人商店では福島県産の取扱いに問題がないことが多い一方で、量販店の中には福島県産品を避けているところがある。

ヒアリング結果

福島県産ヒラメの流通経路について

仕入先

- 沼之内港、小名浜港に加えて令和元年9月から久之浜港でも漁獲が始まった。(福島卸J)
- 仕入先は震災前から変わっていない。(首都圏卸E)
- 豊洲市場に移転後も、仕入先に変化はない。(首都圏小売F)

販売先

- 仲卸業者は、福島県産品を問題なく取り扱っている。(首都圏卸E)
- 量販店には基本的に福島県産品は敬遠されており、主要顧客は個人商店である。(首都圏卸B)
- 震災後は産地指定で福島県産品を扱わないスーパーが出てきており、その数はなかなか減っていない。(首都圏卸C)
- 一部の量販店はいまだに福島県産品を置けない。一般的に、量販店は福島県産品に限らず、ヒラメを買いにくい状況である。最近は寄生虫対策のため仕入れたヒラメを一度凍らせており、刺身用としての販売が難しいことから、販売価格を安くするため、相場が安くないと仕入れにくくなっているという背景がある。(首都圏卸E)



首都圏卸E

- 仕入先は震災前から変わっていないが、量販店は福島県産品を避ける傾向がある。

134

常磐ものである福島県産ヒラメの品質は高く評価されており、需要はある一方で、業種によっては福島県産品を拒否しているケースが見られる。

ヒアリング結果

福島県産ヒラメ に対する反応について

- 福島県産ヒラメは品質の評価が高く、特に近年は品質が向上している。(福島卸J)
- もともと「常磐もの」は品質が良いと言われており、「常磐もの」が欲しいという声は現在でも多くある。(首都圏卸C)
- 福島県産品の評判は特に問題ない。(首都圏卸C)
- 福島の魚の評価は良い。あまり捕っていない分、ヒラメのサイズが大きい。(首都圏小売G)
- 量販店のバイヤーは一貫して福島県産を拒否しているような印象がある。もし放射線の影響があったら考えると、バイヤーとしては福島県産を買いづらいのではないかと。(首都圏卸B)
- 良いヒラメと思ったら身が緩い、または餌の影響で色が青かったなど、そのような話がある。ただし、これらは他産地でもよくあるクレームである。(首都圏卸E)
- 震災食後、福島県で漁獲があった際は、仲卸から福島県産の取扱いに問題はないか聞かれていたが、現在は福島県産を問題なく取り扱っている。(首都圏小売F)



首都圏卸C

- 量販店が福島県産品の取扱いを気にしているが、それ以外の業種はほとんど気にしていない。

福島県産カレイの量について

福島県産カレイは震災前と比べると、漁獲量が絶対的に少ないため、流通量が少なくなっている。また、他県産と比較した場合も、卸売業者の福島県産カレイの取扱量は少ない状況。

ヒアリング結果

福島県産カレイの 量について

- 震災前に比べると福島県での漁獲量は少ない。(福島小売M)
- 震災前は豊富にあったが、現在は漁獲量が少ないイメージである。(首都圏卸A)
- 震災後、カレイ類はヒラメよりも取扱量が減っており、50分の1以下に減っている印象である。(首都圏卸A)
- カレイは震災前と比べ、流通量が減少している。(首都圏卸B)
- もう少し漁獲量が増えて欲しいという希望はあるが、漁獲量が少ない。(首都圏卸E)
- 福島県産マガレイをこの1年で3回、計20ケース・約180キロを仕入れた。1回の仕入量は約60キロである。ただし、他産地と比べると、1回の取扱量は15分の1程度である。(首都圏小売F)



首都圏卸C

- 豊洲市場全体として、近年ではそれほどカレイ類の取扱量が増えていない印象がある。

福島県産カレイは震災前と比べて、価格が下落している傾向にある。ただし、品質が良ければ、他県産と同様の価格となる場合もある。

ヒアリング結果

福島県産カレイの価格について

- 仕入の値段は震災前より安くなっている。特にムシガレイは過去最低の相場である。（福島小売L）
- 品質は震災前と変わらないが、買ってくれる人は限られているため、良い値段が出ない。（首都圏卸A）
- 他県産と比べて、1キロ当たり200～300円くらいの差がある。（首都圏卸A）
- カレイ類はサイズによって価格が異なり、量販店が買うような小さいサイズはなかなか良い値段が出ないという面もある。（首都圏卸A）
- 震災直後は福島県産は安かったが、現在は他県産と比べて価格は変わらない。（首都圏卸E）
- 震災後の流通再開時は半値ほどに落ちたが、ここ1～2年で持ち直してきた。（首都圏卸B）
- 福島県産のマコガレイは品質が良く、他産地より確実に高い値段である。三陸産が「常磐もの」の値段を超えることはない。（首都圏卸C）



首都圏卸B

- 震災前よりも下がっているが、福島県産品に限らず全般的に相場が下がっているため、相対的には他県産と変わらない。

福島県産カレイの流通経路について

量販店は福島県産カレイを敬遠する傾向があり、小売の流通先としては個人商店が中心。また、首都圏で販売されるカレイは北海道からの仕入れが主となっている傾向にある。

ヒアリング結果

福島県産カレイの流通経路について

仕入先

- 仕入先は9割以上が豊洲市場の仲卸業者である。築地から豊洲市場に移った影響はなく、仕入先は以前から変化なし。（首都圏小売F）
- カレイは北海道産がメインであるため、北海道からの仕入れが多くなりがちである。（首都圏卸C）
- 太平洋沖の物は品質が良いが、量がないと北海道産の独壇場になってしまう。（首都圏卸E）

販売先

- 量販店は福島県産品を買わない傾向があり、仲卸業者に販売している。（首都圏卸A）
- マコガレイの場合、「常磐もの」として、仲卸から産地指定されている。また、物量が少なく仲卸がすべて買っていくため、販売先に困ることはない。（首都圏卸C）



首都圏卸B

- 量販店には基本的に敬遠されており、主要顧客は個人商店となっている。

福島県産カレイは「常磐もの」として高く評価されているため、販売しやすいとの声がある。一方で、福島県産を拒否している量販店も存在する。

ヒアリング結果

福島県産カレイに対する反応について	高評価・気にしていない	<ul style="list-style-type: none"> もともと「常磐もの」は品質が良いと言われており、「常磐もの」が欲しいという声は現在でも多くある。（首都圏卸C） ニクモチガレイやヤナギガレイはいわきが得意な魚種であり、高く評価されるため売りやすい。（福島卸J） 福島県の魚の評価は良い。あまり捕っていない分、カレイのサイズが大きい。（首都圏小売G） 量販店が気にしているが、それ以外の業種はほとんど気にしていない。（首都圏卸C）
	低評価	<ul style="list-style-type: none"> 量販店のバイヤーは一貫して福島県産を拒否しているような印象を持っている。（首都圏卸B）

福島県産カレイに関する取組について

福島県産カレイの煮魚は高評価であり、売上が伸びている事例がある。

ヒアリング結果

福島県産カレイの取組について	<ul style="list-style-type: none"> 福島県産カレイの取扱量は多く、利用して近隣の工場で作った煮魚のパックにして販売している。（首都圏小売G） 鮮魚売場で煮魚のたれをカレイと一緒に販売し、簡単に調理できることをお客様に説明することで、売上が伸びている。（首都圏小売G）
----------------	--

139

福島県産その他水産物の量について

福島県産のカツオ、マアナゴ、コウナゴともに漁獲量が絶対的に少なく、流通量が少ない。また、カツオはアニサキスの問題が取扱量減少の要因の一つになっている。

ヒアリング結果

福島県産その他水産物の量について	カツオ	<ul style="list-style-type: none"> 小名浜港や中之作港での漁獲量が多い。（福島卸J） 漁獲量が増加するときは全国で一斉に漁獲量が増える傾向がある。（福島卸J） 漁獲量が少ないため、取扱量は多くない（昨年よりは多い）。（福島卸K） 震災前は扱っていたが、現在は入荷が無い。（首都圏卸A） 震災前は毎日漁獲があったが、令和元年度4月～11月の8カ月間で10回程の取扱いしかない。（首都圏卸B） 今年も昨年と同様にアニサキスの問題があり、カツオの取扱量が減っている。（福島卸J、福島卸K、首都圏卸A）
	マアナゴ	<ul style="list-style-type: none"> 7、8月が底びき網船の休業期間で、漁獲量が少ないため、この時期にアナゴが捕られる。（福島漁協H） 小名浜港からの直接入荷はない。（福島小売M） 漁獲量が少ないため、取扱量は多くない。（福島卸K） 若干取扱量があるかもしれないが、社内でほとんど把握していないくらいの量である。（首都圏卸A）
	コウナゴ	<ul style="list-style-type: none"> いわきでのコウナゴの漁獲量は多くない。また、小名浜港からの直接入荷はない。（福島小売M） 令和元年は福島県に限らず全国的にコウナゴは不漁であったため、さし網でカレイ類（主にマガレイ）を捕るケースが多かった。（福島漁協I）

140

福島県産のカツオ、マアナゴともに、ここ数年で震災前の値段に戻ってきている模様。また、コウナゴは不漁であったため、価格が高騰している。

ヒアリング結果

福島県産 その他水産物 の価格 について	カツオ	<ul style="list-style-type: none"> • いわきで漁獲量が増えると同時に、銚子港や気仙沼港などでも漁獲量が増加したとき、福島県産カツオの単価の下落幅が大きい傾向があるように感じている。(福島卸J) • 相場としては、極端に高い値段ではないが、比較的高い値段で推移していた。(福島卸K) • 気仙沼港も小名浜港も値段は変わらない。むしろ、今年は気仙沼港よりも小名浜港の方が高い時もあった。(首都圏卸B) • アニサキスの影響で需要が減っているため、単価が下がっている。(首都圏卸B) • 震災後からここ3年程で値段が戻ってきた印象。(首都圏卸B)
	マアナゴ	<ul style="list-style-type: none"> • 大きさにもよるが、仕入値は1キロあたりおおよそ500円前後。(福島卸K) • 標準の価格よりは少し安いと思うが、全国的にアナゴの漁獲量が少ないので、ある程度の価格を維持できている。(首都圏卸A) • ここ1～2年で常識的な値段になった。(首都圏卸A)
	コウナゴ	<ul style="list-style-type: none"> • コウナゴのように物量がないものに対しては、福島県産であってもひき合いは強く、値段は上昇する。(福島卸L) • 西日本の不漁の影響で、西日本地域向けに高値で取引されており、価格が高騰。(福島卸J) • 福島県産コウナゴが大漁だった3年前は、しらすが全国的に不漁だったので、高い値段がついた。(首都圏卸B)